慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ミュージアムにおける場づくり : 理科ハウスの事例紹介
Sub Title	
Author	佐竹, 和歌子(Satake, Wakako)
Publisher	慶應義塾大学湘南藤沢学会
Publication year	2015
Jtitle	リサーチメモ : CMR research memorandum 2014 ,p.35- 46
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Technical Report
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KO92001002-2015-001-0035

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ミュージアムにおける場づくり

―理科ハウスの事例紹介―

慶應義塾大学 SFC 研究所 場づくりマーケティング・コンソーシアム
株式会社乃村工藝社
佐竹和歌子
wakako@sfc.keio.ac.jp

1. 概要

慶應義塾大学ＳＦＣ研究所と企業（乃村工藝社・日経リサーチ・大日本印刷）で構成する「場づくりマーケティング・コンソーシアム」（代表玉村雅敏）から 2013 年，書籍『地域を変えるミュージアム–未来を育む場のデザイン–』（英治出版）を出版した．

場づくりマーケティング・コンソーシアムでは，地域の魅力や価値を高めるための場の創造や，地域住民や来訪者，顧客など人と人とのコミュニケーション活動を行う場の持続的な発展に関して，リサーチやツール開発に取り組んでいる．その中で，一昨年は，地域で社会課題の解決や地域振興の要となっているミュージアムに着目した．

今，コミュニティに変化をもたらすミュージアムが全国各地に存在する．また，地域や市民のアイデンティティ形成や地方のブランディングなど，様々な観点でも活用が高まっている．本書では，全国における先駆的なミュージアムの事例を紹介し，社会イノベーションをもたらす場としてミュージアムを意図的につくっていくことが，地域や社会の抱える様々な問題の解決に向けた社会生産性を上げる一つの打ち手となることを伝えている．

本書では，30 のミュージアムの事例を，下記の５つの章によって紹介している．

Ⅰ　社会イノベーションの触媒となるミュージアム

社会課題の解決を目指して，異なる分野を結び付け，新結合を生むアプローチに挑戦する．例えば，障がい者雇用とアートの力がまちの再生と共生を促すアートゾーンや，カフェやショップギャラリーを備えたまちの図書館など．

Ⅱ　コミュニティの魅力を見える化するミュージアム

コミュニティが蓄積している活動の成果や魅力を収集し，工夫を施しわかりやすく伝える．例えば，観光情報と地域活動，博物館機能が一体化したポータルミュージアムなど．

Ⅲ　市民の協働プロジェクトを促すミュージアム

多様な主体が集まり，試行錯誤をし続ける協働プロジェクトが日々生まれる集積体．例えば，子育てと子どもの見守り，高齢者や学生など多世代の交流を促す地域住民による絵本プロジェクトが地域につくった絵本の家など．

Ⅳ　価値を共創する拠点となるミュージアム

時を経て，コミュニケーションや関係づくりが積極的になされることで，新たなコミュニティを生み出し，価値を増幅させるプラットフォームとなる．例えば，廃校を再活用した地域の集まりの場や農業の生産者と消費者を結ぶ開かれた地域の大学など．

Ⅴ　ワクワクが変化を生み出すミュージアム

驚きや懐かしさ，心地よさなど人の五感を刺激するクリエイティブな仕掛けやデザインの工夫を施すことで，独自の世界観を創りだす．例えば，通過するだけの地下通路が，地域のアーティストの作品で彩られた美術館に変わることなど．

各事例から得られる知見を通じて，ミュージアムの持つ価値や潜在力への認識を促すことに加えて，人が集う魅力的な場の創り方を示唆し，豊かなコミュニティ形成に寄与することを目指す．

本稿では，「Ⅴ　ワクワクが変化を生み出すミュージアム」から，【理科ハウス】を紹介する．

2. 事例紹介【理科ハウス】

世界一小さな科学館で出会う驚きの科学体験

逗子市の中央，池子にある緑豊かな第一運動公園を抜けた先，一軒家が並ぶ住宅街の一角に理科ハウスは現れる．２階建てのしっかりとした造りの建物は，一見するにまさかここが科学館であるとは誰も思わない．エントランスに，ＬｉＣａ・ＨＯＵＳｅと大きな文字．周期表のLi（リチウム），Ca（カルシウム），H（水素），O（酸素），U（ウラン），Se（セレン）の化学記号でネーミングされている．

理科ハウスの外観

夏休みの理科ハウスは，子どもたちの歓声と熱気に包まれていた．夏の企画展「これってほんとにいきているの？いのちのけんきゅう展」が開催中であり，フロアのみならず，階段からトイレまでスペースいっぱいに，趣向を凝らした生命の不思議があふれていた．

（そこかしこに問いかけ展示）

この企画展を体験するためには，はじめに必ず行わなければならないことがある．それは，朝から理科ハウスに来るまでに出会った生き物を 10 あげることだ．次に自分のあげた 10 の生き物を，ほにゅう類，鳥類，昆虫，植物，菌類などに分類する．最後に，カードをボードに張り付け，他の人が書いた生き物を見る．「ほにゅう類」の項目には，ヒト．「真正細菌」には，納豆．自分ではまったく思いつかなかった生き物が掲示されていて，見ているようで見えていない，子どもたちとの世界の見方の違いを突き付けられる．「たまごのけんきゅう・だれのたまごかな？」のコーナーは，どの動物のたまごか，卵を見分けるクイズだ．個々の卵の前に置かれたペットボトルのキャップをひっくり返すと，答えが書いてある．思わぬ落とし穴が潜んでいるので気が抜けない．

理科ハウスの展示体験は，一筋縄ではいかない．なるほど，一本とられたと，思わずうなってしまうヒネリの妙．鋭い着眼点と奥ゆかしいユーモアがしっかり待ちかまえている．

まず，考える．やってみる．

展示体験は，「問いかけ」にはじまる

この日，いのちのけんきゅう展の目玉のワークショップがはじまった．それも，「ブタの内臓観察タイム」．待っていましたと言わんばかりに子どもたちが，わっと中央のテーブルに集まる．用意されたのは，本物の内臓の数々．肝臓や胆のう，胃，小腸，大腸，眼球や肺など次々に机に並べられる．

「これは，小腸か大腸かどっちだと思う？」

「小腸が赤いのはなぜ？」

「小腸は，栄養を吸収するためにあるから，大腸より長いんだよ」

「これは，心臓だよ．さわってごらん」

「ハツってこんなに固かったのか」

「ハツの大きさって，本当に握りこぶしより少し大きいくらいなのだね」

「じゃあ，実際に肺を膨らませるよー．よぉーく見てみて！」

「おぉー!!こんなに膨らむんだ！　横隔膜ってこんなふうに動くんだ！」

（内蔵解剖タイム，子供のほうが興味しんしん）

子どもたちは目を輝かせながら，学芸員の山浦安曇さんの一挙一動を食い入るように見つめ，質問に対して我先に応えようとする．大人顔負けの受け答えだ．

理科ハウスでは展示もワークショップも，「本物を見せること」，「問いかけにはじまり，手を動かして考えさせること」，そして，「学芸員と来館者，来館者同士の生の対話が生まれること」に終始徹底している．

企画も展示も，すべて手づくり．スタッフは，森裕美子館長と山浦学芸員の二人だけ．二人とも，フル稼働だ．その中で，子どもたち同士で，はたまた，子どもが親に，「ねぇねぇ聞いて」と教え合いが自然に始まっている．考えて試したその先に手に入れたことは何でも嬉しい．隣に悩んでいる人がいるとついつい教えたくなってしまう．館内いたるところで，白熱する議論．「ええ！どうして？」「なんで？」「こうじゃない？」考えて，驚いて，思わず笑って．大人も子どももみんなして，必死だ．来訪者の表情がくるくると変わり，ざわつきとどよめきが一向に途切れない．

（ホンモノの脳の大きさと重さをはかってみよう）

大人も子どもも夢中になってしまう科学体験の秘訣

本物志向の参加体験型である展示やワークショップに大人も子どももついつい夢中になってしまうのだが，そこには，コミュニケーションの取り方や展示体験のデザインのされ方に，心をつかむ秘訣が隠されている．

まず，分野がミックスしていること．石のことも，人の体のことも，てこの原理も，生命の成り立ちも，それぞれ分野に区切られることなく同列に配置される．そのため，科学者や専門家同士，また先生同士で分野の垣根をこえた会話が始まる．科学の原理原則は根っこのところでちゃんとつながっているのだ．子どもだけではなく大人同士でも，今日も理科談義がここかしこで花開く．

（塩，砂糖…調味料を区別できますか？）

次に，日常に目で触れるものを題材に使っていること．たとえば，「春のかおりのカプセル」では，外にある植物を採取してその匂いの元を当てさせる．「あててごらん ほぼ宝石ショップ」では，プラスチックや化石など，普段気にもとめない石をほんもの（自然のもの），にせもの（加工物）にわけさせる．他にも，台所の調味料や洗剤，電池やＰＣの基盤など，身近にあるものの中味や使い方を，捉え方ひとつで科学するきっかけに変える．「家族で来てもらって，家に帰

ってからも，家にあるもので試しにやってみてほしい．家庭でも，理科ハウスの続きをしてもらいたいのよ」．ねらいを山浦さんがそう語った．

さらに，対象が幅広いこと．対象年齢は一応，小学校 3 年生以上としているが，実のところ特に決めていないという．大人から低学年の子どもまで十分に興味喚起する内容だ．ただ山浦さん曰く，来館者とのコミュニケーションの取り方で意識していることがあるという．それは，少し上の子の目線にあわせて対応すること．子どもたちが質問に一斉に応えようとしたら，あえて年上の子に聞く．年下の子どもは年上の子から学ぶものだし，何より，答えた子ども自身に自信がつく．

こうした，その場を低年齢化させない工夫（少し上の子にとってそこが幼稚に思えると，離れてしまうのだそうだ）一つで，その教育効果は絶大だ．

理科ハウスの成り立ち
科学を身近に，科学が文化になるために

理科ハウスが開館したのは２００８年の５月のこと．館長の森さんが逗子のこの場所に，３００年はもつと言われているＥＲＭ外断熱工法を使った建物の設計から携わり，私設のミュージアムとして開館した．森さんが，科学のおもしろさに気がついたのは 38 歳の時．子どもといっしょにやってみた科学あそびがきっかけとなって，ミニコミ誌「なるほどの森」を 7 年間発行した．また，「科学あそび伝道師」を名乗って，サイエンス道場を２年間開いた．ワークショップや体験教室を図書館や児童館で繰り返すうちに，子どもたちがふらっと学校帰りに立ち寄れる科学館があれば，と思うようになった．そこで，かつてＰＴＡ仲間だった山浦さんに声をかけ，二人で科学を身近に感じられる地域の科学館をつくろうと計画した．

理科ハウスの資金源は，わずか１００円の入場料（中学生以下は無料）と，オリジナルの周期表Ｔシャツや科学キットなどショップで販売するグッズ，出張講座，そして寄付や善意から成る．一つのミュージアムを運営していくのに，まだまだ全然足りない．日本では，ミュージアムや文化に寄付をするという行為はまだ定着していない．

国や自治体から助成金や補助金をもらう道もあるが，理科ハウスはそれをあえて選ばない．むしろ，その予算を学校の理科教育の充実に充ててほしいという．森館長は，こう続けた「開館の準備から今まで，いつも科学を身近なものにするためにはどうすればいいのかをひたすら模索してきました．どこの科学館でもそうですが，助成金なしに経営していくのはなかなか大変です．それでも，地域の人やまちの人にその存在が必要と認められれば，何かきっと道はあるにちがいないと楽観的な私はいつも思います．利用者にとって，科学が身近になる場が必要と思ってもらえるように，その対価への意識を変えることからはじめていきたいと思っています」

（楽しそうに語る森館長（右）と山浦学芸員）

理科ハウスには，日々，さまざまな人が集う．学校帰りにヘビの死骸を持って観察したいとやってくる女の子たち，横浜からひとり電車に乗って毎週末訪れる小さな理科博士，夏の自由研究のネタ探しに奔走するお母さん，恒例となったサイエンスショーを実施する中高校生科学部の面々，一緒にサイエンスカフェや科学教室を開催する科学者や専門家，他にも，変わった科学館の噂を聞きつけてやってくるミュージアム関係者，学校の先生，学生，環境に携わる人，そして，「こんなに山菜とキノコがとれたよ」とお裾わけしてくれる近所の蕎麦屋さんや「大きい蜂の巣があるのだけどどうしよう．解体してみる？」と相談を持ちかけてくれるお父さんなど，同じ地域に暮らすご近所の人たち．

「科学の研究者，一般市民，そして子どもたちが，科学について語れる場所，それが理科ハウスです．多くの人に支えられていることに感謝をしながら，地域の科学館としてよりいっそう親しんでもらえるよう，まだまだやりたいことは，たくさんあるね」．森館長と山浦さんは，楽しそうに笑う．

科学する心を通して，人と人を結び付ける

理科ハウスが地域の一員として認知されてきたのは，地域のお祭りやイベントに声がかかるようになったことにあらわれている．たとえば，逗子のコミュニティパークに出店しステージで実験ショーを展開したり，ツーリングのポイントになったり．もちろん，小学校の理科室のお掃除や地元の川の保全活動など，こちらから積極的に地域に出ていくことも日常だ．

２０１１年３月，地震や津波がなぜ起きるのか，放射能とはいったいどんなものなのか，テレビや新聞で何度も放送されているがわからないと，不安げな気持ちいっぱいに地域の人たちが駆け込んできた．

そこで，地震のしくみを理解するための装置づくりから，専門家に直に話を伺うサイエンスカフェ，もしも逗子で大地震が起きたらどう行動するかのワークショップなど，さまざまな企画を急きょ開催した．大人から子どもまで，多くの地域の方が参加したが，みな一様にこうもらしたという．「私たちは，大学の先生や研究所の専門家の話を聞きたいのではない．私たちは，森さんや山浦さん，また，ここで暮らしている人たちと，一緒に話をしたいの」と．実態の伴わない情報に振り回されることなく，判断するために知識をつけて，人と対話すること．サイエンスコミュニケーションとは，共に暮らす人たちと同じ目線で語りあう，そんなとてもシンプルなことなのだ

理科ハウスには，「みんなのぎもん」というコーナーがある．ここは，ふだん疑問に思っていることを，「おふだ」に書いて張っておくと，誰かが裏に答えを書いてくれるコーナーだ．時に複数の人から答えを寄せられることも，時に答えに反論を書く人もいる．「おふだ」の質問が途切れず，その回答がいつも賑わっているのは，きっとそこが，「科学する心」が詰まった，みんなの場であるからだろう．「みんなのぎもん」から，実際に装置をつくって，実験も行った．

(「みんなのぎもん」によせられるユニークな疑問)

(「みんなのぎもん」が壁一面にびっしり並ぶ)

理科ハウスでは，誰もが身の回りの不思議に目をみはり，謎を解き明かしていく発見に驚きの声を上げる．「感じる」，「見つける」，「知る」，そして，それをまわりに「伝える」．その楽しさやおもしろさに火を点けてくれる場所は，周辺の地域の人たちや利用者のみんながつくっているのだ．

身の回りにある不思議さに目を向けることから広がる世界は，果てしなく広く新鮮だ．そしてそれを受け止めてくれる存在は，家庭にも，学校にも，自分の傍にある．理科ハウスは，学校と家庭，科学館と家庭の間にある架け橋のような存在だ．大人も子どもも一緒になってご近所にふらっと訪ねられる科学館こそ，これからの社会をつくる新しい仲間なのかもしれない．

3. 結びにかえて

本稿では，ミュージアムにおける場づくりの事例として，理科ハウスのみの紹介を行った．このほかにも，全国各地でキラリと光る素晴らしいミュージアムの取り組みが，『地域を変えるミュージアム』の本の中につまっている．ミュージアムやまちづくりに関心を持つ人たちに，ぜひ，手に取ってみて頂きたい．

場づくりマーケティング・コンソーシアムでは，今後も，ミュージアムのみならず様々な領域で，コミュニティの力を引き出し地域の魅力を高めるため，地域に新しいインフラやエンジンをつくる活動を行っていく．多様な主体が集い，学び，協力関係が生まれる拠点となる空間である場において，地域に暮らす人，地域を訪れる人など，様々な人の共感やつながりを促進させる「場づくり」の仕掛けと仕組みを，どんどん拡げていきたい．そうしてコミュニティの潜在的な力を引きだし，地域の課題解決と新たな魅力づくりを実践していく．